

# バックアップの迷い

荒木春彦

## バックアップの迷い

---

よく野明と行動を共にすることが多い。

それは一号機のフォワードとバックアップという関係である以上、お互いに連携に不備がないように意思の疎通が十分に行えるようにである以上、必要である。

だが、それは不可欠だろうか？

特殊車両二課第一小隊に引継ぎを終え、非番になった俺と野明は夜の渋谷のカフェでお茶をシバいていた。

野明はご機嫌に、目の前のイチゴパフェをつつついている。

俺はアイスコーヒーを啜りながら、目の前の相棒を見て、ふとそう思った。

もし、俺があんな空き地の埋立地ではなく、市街のどこにでもある警察署で刑事でもやっていたのなら、目の前にいるのは間の抜けた婦警ではなく、脂汗浮かせた中年のオヤジだったかもしれない。

一応目の保養になる分、野明に感謝だ。

その本人は、

「？」

というような顔でスプーンを咥えながら俺を見た。

「なんだよお。遊馬も食べたかったら注文すればいいじゃーん」

「俺は別に食べたくねーよ。むしろ食べる気が失せてくらあ」

「あっそ。後で食べたくなくても知らないよ！」

俺はそんなに食い意地張ってるように見えるのか？

確かにハゼの干物ばっか食べてると甘い物が食べたくなる気はするけどな。

いや、そうじゃないんだって。

野明をもう一度一瞥する。

...うん、悪くはないよな。

ボーイッシュだが、素材は悪くない。

香貫花や南雲隊長のような知的さはないが.....。

等身大の素直な女の子だよな。

感情表現も豊かで、見てて飽きることはない。

レイバーの操縦も技術より感性で乗ってるし。

まあ、それが一号機に妙なクセを付けちまってるんだが.....。

.....アレ？何の話してたんだっけ？

ああ、野明の話か、主にヴィジュアルと性格の。

いや、なんだ、結論からすると.....、

「悪くない」

なんだよな。

そう、良いではなく、悪いではなく、「悪くない」。

俺は野明の事そんな風に考えてたんだな。

「女」として。

でも、野明の事を女として考えるより、仕事のパートナーとして考えた事の方が山のようが多い。

仕事のパートナー、特に警察官兼レイバー乗りとして考えると、あいつはすごくいい。

スペックの違いを操縦の機微でカバーする創造力と柔軟性。

大田の馬鹿の、乗り潰すつもりで動かす操縦とはまるで違う。

野明は明らかに、従来のレイバー乗りが、レイバーを重機として扱うのとは違う、まるでもう一人の自分のように動かす。

これは人間の根本的なセンス、創造力の違いだ。

俺は野明以上のレイバー乗りを見たことがない。

俺がそんな事を思っている内に、野明はパフェを平らげたようだ。

ガラスのカップに弾けるスプーンの音が小気味良い。

「はあ～～～……、美味しかったあ♪人間生きてて良かったって思う瞬間だよ♪」

「はいはい、そりゃ良うござんしたね」

イチゴパフェを堪能した野明はお代わりのコーヒーを冷ましながら飲みはじめる。

そして俺は、再び思考の海に漕ぎ出した。

そもそも、なんで俺はこんな事を考えたんだろう。

この目の前のちんちくりんのせいかな？

なんでこいつの事をこんな風に意識せにゃならんのだ？

仕事仲間か……それとも「女」としてか……。

「そっか……、お前も女なんだよな」

「む？あたしの事、男とかそんな風に見てたんだ？」

野明が膨れる。

なぜだか、少し野明が可愛く見えた。

「ときどき忘れるんだよな。お前があんまり女らしくないからさ」

俺はいつも通りのイヤミを言った。

「あたしだって女の子だよっ！そりゃ……見た目とかあんまりぱっとしないけどさ……」

「まあ、お前がもう少し香貫花みたいに女っぽかったらな。俺も相棒として悪い気はしないぜ？」

「うっ！うう……」

お、困っとる、困っとる。

「ま、お前も素材悪くないんだから、もうちょっと女の子らしくなりゃあ……」

「女の子らしくなったら……」

「ん？」

野明が口を挟んできた。

「女の子らしくなったら……遊馬は……」

野明は俺と視線を合わせた、が、直ぐに逸らし、カップの中のコーヒーへと移した。

両手を漆器のカップを包み込み、ぶつぶつと小言を反芻し、慎重に言葉を選んではるように見えた。

少し言い過ぎたかと思った。

場が重い。

言い過ぎた俺にも責任があるのだから、野明の言いたい事は言わせてやろう。

まあ、何にせよ、笑ってやろう。

「な、なんだよ。畏（かしこ）まっちゃってさ。悪い悪い、俺も言い過ぎちゃったよ」

「……じゃあ、あたし、このままでいいのかな？女の子らしくしなくてもいいのかな？」

む、この質問は難しいな。

下手な事を言うと野明を傷つけそうだし、率直に言ってやろう。

「い、いや、別に女の子らしくなってもいいと思うぞ？女の子が女の子らしくなっちゃ駄目っていうのもおかしい話だろ？だから、野明もいいんじゃないか？」

「そ、そっか。そうだね！」

お、明るくなった。

この答えで正しいフラグは立ったようだな。

……フラグ？俺は何を言ってるんだ？

「じゃ、じゃあさ、さっきの……話に……戻っちゃうんだけどさ……」

も、戻っちゃうのか。

なんなんだ、この展開？

「あ、あのさ、ちゃんと話聞いてね！冗談言っちゃ駄目だよ！」

「お、おう……」

野明に気圧される。

そうとう真剣だな。

こりゃちゃんと答えないとえらい目に遭いそうだ。

「あ、遊馬はさ……」

「おう……」

……次の言葉を言うまで、結構間があった。

「……好きに……なってくれる？……女の子らしくなったら……」

……えっと、ちょっとまで、何かが抜けてるぞ？

主語か述語か、えっと、名詞が抜けてるな、よし、あ、待て、形容詞は？

ああ、国語真面目に勉強しておけばよかった！

どうせ自分の国の言葉だからって、手抜かなければよかった！

古文で投げたもんな一、古文で！

古文なんてありゃ日本語じゃないぞ！

地球外生命体の使用言語だあれは！

……ちょっと待て、何でこんな事考えてるんだ？

俺は篠原重工の放蕩息子にして、警視庁警備部特殊車両二課第二小隊一号機バックアップ担当の篠原遊馬巡查だろう！

冷静になれ！クールになれ！

落ち着いて考えろ！

飲み物を飲んで頭を冷やせ！

そうだ！アイスコーヒーが良い！

カフェインが脳を興奮状態から熱を奪い、クールダウンしてくれるだろう！

ガッ！

という音とともにアイスコーヒーのグラスを持ち、ストローなんざ小ざかしいとばかりに床に

捨て、氷を噛み砕き、粉碎し、コーヒーとともに胃に流し込む！  
ゴクゴクゴクゴクゴクゴクゴク.....。

ふうーっ！ごっつあん！

「あ、遊馬？」

「あ、何？」

「.....ふうー、遊馬に答えを期待したあたしが馬鹿ですよー」

「え？え？」

俺はものすごく大切な事を忘れてる気がする.....。

そうだ、そもそもなんで俺は冷静になる必要があったんだ？

ちょっと待て、過去を振り返ろう。

人間は立ち止まって振り返るのがしばし重要な事になる。

えーと、野明はこう言ったんだっけ？

『遊馬は』

『好きになってくれる？』

『女の子らしくなったら』

「だ、誰が？」

「へっ？」

思わず口に出ていたらしい。

だがそんな事気にするかっ！

「誰が、誰が好きになるんだ！？」

「あ、あたし.....」

「どうなったら！？」

「女の子らしくなったら.....」

「誰を！？」

「へっ！？」

「誰をっ！？」

俺は完全にクールじゃなくなっていた。

大きな声をカフェ中に響かせていた。

「あ.....遊馬をだよっ！バカッ！」

そう言って野明はカフェを飛び出して行った。

「の、野明！」

野明を追いかけようと思ったが、勘定がまだだった！

店を出て姿が遠くなる野明を見失うまいと、紙幣を何枚か取り出し、テーブルに叩き付けると、急いで野明の後を追った。

あのちびっ子はやはり運動神経が良い。

集中していないと、すぐ見失いそうになる。

だが、野明が向かった先は、本人すら意図していない様子だった。

野明も目的もなく、ただ逃げているようだった。

「待て！野明！」

「バカ！来るなよお！」

「あ、お前！バカって言う方がバカなんだぞ！？」

「じゃあ、遊馬だってバカじゃん！」

「うるせー！」

お互い、息が切れた頃には、狭い通路が入り組んだ場所だった。

その頃には、俺も野明も疲れて動きは止まっていた。

「ハア……ハア……な、なんで、追いかけてきたんだよ！」

「はぁ？お前が逃げたからだろ！」

「あたしは遊馬が追いかけるから……」

「違う。お前が先に逃げた」

野明はとうとう顔を赤くして声を張り上げた。

「遊馬が大きな声で聞いてきたからだよお！」

う……。

「店中に聞こえてたよ……恥ずかしいよお」

「わ、悪い」

確かに、あの時の俺はクールじゃなかったな。

恥ずかしい。

だけど……やっぱり少し信じられない。

だから、もう一回聞きたい。

「あのさ……、混乱しててよく聞こえなかったからさ……もう一回聞いてもいいか？」

「えー……」

「いや、そこを頼む！幻聴じゃないって確かめたいんだよ！この通り！」

俺は合掌して野明に拝んだ。

「もぉ～……。女の子に二度も言わせるなんてホント、サイテー」

「いや、わかってるって……」

「遊馬のスケベのひねくれモン」

「わかってる……」

「自己中心的でワガママで……」

「わかってる……わかってる……」

だんだん沸々と怒りが沸いてきたぞ？

「でも、みんなの事を考えて、信頼できて……なんだかんだ言って、頼りにしちゃうんだよなあ～」

「へ？」

その時、あいつは、俺が今まで見たことないような、とびっきりの笑顔でこう言った。

「あたし、遊馬の事好きだよ！」

あいつを女だと意識したのはどのくらいだったか。

だが、今は女としての野明しか感じなかった。

女の野明が俺の胸に飛び込んだ。

「もっと女の子らしくなったら……遊馬は好きになってくれるかな？」

野明って、こんなに可愛かったっけ？

いや、違う。

これも元々の野明なんだ。

誰だよ、女の子らしくないって言った奴は。

俺は野明の体を抱きしめると、頭をポンポンと撫でてやった。

「お前は十分女の子らしいって」

そう言うと野明は顔を真っ赤にした。

「そ、そうかなあ？」

十分可愛いって。

しかし、あまりここで可愛くされても困る。

だからこう言おう。

「な、なんなら今からそれを証明してもいいぞ？」

「へ？」

俺は野明の見てる前で適当な看板を指した。

ピッカピカのネオンが光る、カップル御用達のホテルの看板を。

「え？え？ええええええ！？」

野明のその顔は

「なんでこんなところにいるの？」

とでも言いたげだが、来たのはお前だ。

周囲がホテル街だと気づいた野明は顔を赤くして縮こまった。

あんまりイジってやるのは可愛そうだな。

だが、野明は懸命に小言をつぶやいていた。

「あ、遊馬がいいなら……………いいよ……………」

おいおい、無茶するねえ。

ノミの心臓のクセに頑張っちゃって。

「おいおい、冗談だって……」

すると、野明は深刻な顔で食いついた。

「じょ、冗談って……どこまでが冗談なの！？」

「え？あ、いや……その……」

「あたしは……本気なんだけどな……」

……ったく、本当に無茶しやがって。

「冗談って言ったのが冗談だよ。可愛いお姫様の健気な告白を流すような薄情な奴じゃねーよ、俺は」

「お、お姫様なんかじゃないよ……」

「だよな？流石にお姫様には見えないな。いや、俺も自分で言ってる無理があるなと思ったよ」

「うー、うるさいなあ！」

「あー、こら、暴れんな！」

俺たちはいつしかお互い笑い、お互いを抱きしめあっていた。